

ワシントン州立大学看護学部教員の岩手県立大学来訪事業報告

松川久美子, アンガホッフア司寿子, 上林美保子, 内海香子, 遠藤良仁, 大久保牧子,
工藤朋子, 後藤仁子, 千田睦美, 福島裕子, 伊藤 収

A Report of Faculty of College of Nursing of the Washington State University visiting Iwate Prefectural University

Kumiko Matsukawa, Shizuko Angerhofer, Mihoko Uebayashi, Kyoko Uchiumi, Yoshihito Endo,
Makiko Okubo, Tomoko Kudo, Satoko Goto, Mutsumi Chida, Yuko Fukushima, Osamu Ito

キーワード：ワシントン州立大学 看護教員来訪 国際交流

Keywords : Washington State University, Faculty of College of Nursing visit
International exchange

I はじめに

平成29年10月2日より,同8日の7日間に渡り,岩手県立大学(以下,本学)の国際協定締結校であるWashington State University College of Nursing(以下,WSU)のSpokane校からDr. Jo Ann Dotson先生(以下,Jo Ann先生)とVancouver校からDr. Catherine Van Son先生(以下, Van Son先生)が本学を来訪された。

その主な目的は,現行の国際交流協定の更新に関する話し合いであったが,同時にJo Ann先生とVan Son先生それぞれの専門分野に関連する岩手県内施設の視察と,岩手県内の文化施設の視察であった。

II 事前準備

今回のWSUの来訪は,平成29年3月のWeb会議でWSUからの訪問の意向を確認したことに端を発し,WSUの新学期には10月の来日が確定したことから本学の受け入れの準備が始まった。その背景には,平成27年度本学看護学部のWSU海外研修において,当時担当されていたVan Son先生から,将来的にはWSUからも教員や大学院生の相互交流の希望が語られていた。また,看護学部では県立大学第三期中期計画の平成30年度目標に協定締結校からの受入

を行い相互交流の方針をあげている。

今後,本学とWSU教員や大学院生が研究の目的で交流していくためには,先ずもってWSUの教員自身が日本の保健医療システムの現状を知り,今後の方向性を検討したいというものであった。そこで,Jo Ann先生の小児看護学(学校保健・母子保健)とVan Son先生の老年看護学に対応する本学の専門領域の教員にプログラムの検討と当日の視察の案内について協力を求めた。その他のプログラムは,大学院授業,岩手看護学会,WSU研修生との交流,岩手の文化を紹介など,滞在中に予定があり実質的に対応可能な事業とした。視察先の交渉と詳細な時間管理は,当日のプログラムを担当する専門領域の教員が行い,予算や全体調整などは学部長・学科長・国際交流委員会・教育支援室(教務・国際交流グループ)が適宜協議した。当初予算は確保されていなかったが,本学創立20年記念事業に位置づけることが大学本部でも承認され,大学の全面的な協力の基に実施できた。

III スケジュール

本学での来日は,平成29年10月1日(日)から10月9日(月)であり,表1およびTable.2にスケジュールを示す。

IV 学内スケジュール

1 学部授業視察について

今回の来訪プログラムは、看護情報学（2年生後期開講、必修科目）への参加から始まった。これは当初予定されていなかったことで、盛岡到着後、国際交流委員の担当者らと翌日からのプログラムの打ち合わせを行った際に、両先生から学部の授業視察の希望があり急遽設定したものであった。

図らずも初回授業であったため、履修生にとってはサプライズゲストとなった。すでに米国では看護情報の専門看護師養成が制度化され、看護職がeラーニングで学ぶスキルは新人看護師までの必須事項となっている。WSUでも、3つのキャンパスをwebシステムで繋いだ「遠隔授業」は日常的に行われているとのことであった。Van Son先生からは、「どのようなデータ・情報が必要か自ら判断し、収集、判断し、ケアとして患者に還元できる看護職になって欲しい」とのメッセージをいただいた。

両先生もゲストアカウントで看護情報学のeラーニングサイトにアクセスしていただいた。写真はVan Son先生が学生に向けてメッセージを述べているところ（図1）。Jo Ann先生（左から二人目）は、講義内容の問題文を翻訳サイトにコピーし英語に変換しながら回答し、正答であった。

2 歓迎プログラム

日程3日目夜に、本学の有志教員が参加し、Jo Ann先生、Van Son先生歓迎の夕食会を開催した（図2）。岩手の地元食材にこだわったイタリアンを味わいながら、これまでの両大学間の交流の思い出話や今回の訪問で施設を見学し岩手の人々と交流された感想、研究科FDで話題になったWSUにおけるDNP（Doctor of Nursing Practice）コースの詳細など様々な話題に花が咲いた。

3 協定見直し会議

日程5日目の午前中に、看護学部棟2階の「学部長室」において、WSU側はJo Ann先生とVan Son先生、本学側は武田利明学部長、福島裕子学科長との間で、両校の交流協定についての話し合いが行われた。なお、大学の国際交流グループの桜田康子主任主査と、伊藤 收看護学部国際交流委員長が陪席した。

会議は、一貫して和やかな雰囲気の中で行われ、今後も継続して交流協定を続けていくことが確認された。さらに、WSU側から、現在は本学の学部生がWSUを訪問しているが、今後はWSUの院生（Jo Ann先生とVan Son先生の担当院生）が本学を訪問し、両先生の専門分野における日米両国の制度や分野の違いや共通性について、共同研究・共著作成を実施したいとの希望が出された。

4 送迎プログラム

日程5日目の11:30～13:30の時間帯で、看護学部棟3階会議室において、Jo Ann先生、Van Son先生のお別れ会を開催した。会には、看護学部教員に加え、平成27年度にWSU研修に参加した現看護学部4年生も参集し、部屋の飾り付けの準備から協力してもらった。武田学部長の挨拶に続き、Jo Ann先生とVan Son先生からは、この来学期間中の本学教員のもてなしに感謝するとともに、これからも良好な友好関係の継続を願うという言葉をいただいた。

会は、国際交流グループに手配いただいたケータリング料理の立食形式で進み、両先生方を囲んでそれぞれ会話を楽しむ時間を過ごした。特に、27年度のWSU研修に参加した学生は、英語で研修後の近況を共有したり、卒業後の進路の報告をしたりと、研修中にお世話になった感謝の気持ちを改めて表す機会となった。Jo Ann先生、Van Son先生も学生ひとりひとりに声をかけ、笑顔の再会を喜んでいらっしゃった様子であった。途中、今回の来学中に撮影された、両先生の施設訪問での写真によるスライドショーの上映があり、その後、本学さんさ踊り実行委員の2年生によるさんさ踊りが10分程度のバージョンで披露された。両先生は、迫力ある笛太鼓の音に調和したしなやかな踊りを熱心にご覧になり、「練習にどれくらいかかったか」「優秀賞という結果が納得いく素晴らしい踊り」とコメントをくださった。

会の終わりでは、福島学科長よりそれぞれの先生に、秀平塗の花瓶がお土産として手渡され、伊藤看護学部国際交流委員長の挨拶で閉会となった。

5 次回WSU研修予定の学生との打合せ会

日程6日目の11:00～13:00の時間帯に、共通棟C-201を会場に、平成28年度WSU海外研

修に参加する国際看護論演習履修の3年生9名との打合せ兼交流会を開催した。9名の学生はそれぞれ、名前と趣味・特技について英語で自己紹介をした。なお、今回のような研修前の段階での事前の顔合わせは初の試みであった。

Jo Ann先生とVan Son先生からは、WSU研修で滞在中のアクティビティについて、WSUの看護学生の講義と一緒に参加することもあれば、研修生を対象とした特別講義もあることを紹介された。また、学生それぞれから関心のある看護の領域の発表があり、プログラム作成に反映したいと言っていた。さらに、滞在中の食事やホテル生活、WSUの学生との交流についても説明くださり、またショッピングモールで買い物もできるし、アイスホッケーの試合も観戦できるといった具体的な紹介で、学生にとっては滞在中の内容をイメージする機会となり、不安の軽減につながった様子であった。会の途中からは、お弁当を食べながらの交流となった。学生からは、アメリカの看護学生はどのようなカリキュラムで学習しているのか、どのような実習をしているのかといった質問がされ、両先生はアメリカの仕組みを日本とどう違うかを確認しながら、ジョークを交えつつ丁寧にご説明くださった。事前にこのような情報を得られたことで、研修のレディネスが違ってくると感じられた。また、ダブルダッチの活動をしている学生がいることで、ぜひWSUでも披露してほしいと提案があり、研修学生とWSU教員とで直接交流したことで可能となるプランニングを実感した。学生は、両先生と積極的にコミュニケーションを図り、終始笑いあいの楽しい雰囲気では終了した。(図3)

V 老年看護学分野の視察

筆者が2014年9月にWSUでの短期研修の機会を得た際、Van Son先生のコーディネートでワシントン州Spokaneの高齢者ケア施設の見学を行った(千田 2015)。認知症高齢者へのケア方法としてユニットケアが行われていることは我が国と同様であったが、施設の雰囲気やアクティビティの内容など、文化的な違いがケアに表れており大変興味深い研修であった。そこで今回Van Son先生の視察施設として、認知症対応型共同生活介護(グループホーム)を計画し、我が国と米国の認知症高齢者ケアの相違についてディスカッションすることを目的に視察

施設を設定した。盛岡市のグループホームぬぐまるの家と小規模多機能型居宅介護施設と願寿を視察したのは、グループホーム、デイサービス、有料老人ホーム、小規模多機能型居宅介護施設等を経営する株式会社ぬぐまるの家の菊池要子代表取締役が看護職であることが大きな理由である。視察時には看護職が高齢者ケア施設において専門職性を発揮し、自律的かつ協働的にケアを実践していくことについて多くの議論を行うことができた。

また、我が国の高齢者ケアは多世代・多様なケアとの複合的なサービスへの転換期を迎えている。保育施設と高齢者介護施設の両方の機能を持つ幼老複合施設は近年話題を集め、今後拡大することが予測されるが、高齢者と障がい者のケアを同じ法人・建物内で行う施設は古くから存在していても話題として取り上げられることは少なかった。しかし、高齢者介護におけるケアミックスのもたらす経済的側面や、ケアする側とケアされる側の相互関係という側面の意味の大きさは周知の事実である。そこで、高齢者デイサービスと障がい者の就労移行支援事業等を行っている、盛岡市の社会福祉法人千晶会夢つむぎ城南も視察施設として訪問した。1階では高齢者のデイサービスが、2階では就労移行支援事業、就労継続支援事業が行われており、ゆるやかに高齢者と障がい者が触れ合う環境が整えられており、Van Son先生は多様な人々が暮らす地域の拠点としての事業所の意味について、職員に興味深く質問なされていた。

視察後は我が国と米国の高齢者ケアの実情を比較し、今後の高齢社会で看護職が果たすべき役割や社会から求められている責務について、議論を深めることができた。

VI 地域看護学分野の視察

地域看護学分野の視察では、各々の専門領域に応じてJo Ann先生には母子保健を、Van Son先生には高齢者の事業の視察を設定した。

母子保健では、滝沢市健康推進課の協力を得て、母子保健計画に基づき行う保健行政の説明を受けたうえで、「3～4ヶ月児離乳食相談」「9ヶ月児相談」の保健事業を視察した。離乳食相談は、栄養士が児の口腔機能の発達に合わせて離乳食を進めることを指導し、参加の父母が実際に米粥や野菜スープからすり鉢を使い離乳食を作り試食するという内容であった(図

4). また、育児相談では、小児科医の診察や保健師や栄養士による個別保健指導を視察し、母子健康手帳の活用や予防接種に関心を示していた。また、就学前の子どもの健康支援では、行政と保育所との連携は必要であることから、りんごの森保育園を訪問し子どもの保育の様子を見ていただいた。

高齢者の事業では、花巻市健康づくり課及び長寿福祉課の協力を得て、高齢者の健康づくりや介護予防事業として「通いの場」「特定健康診査事業」「高齢者家庭訪問」を視察した。「通いの場」は、住民が主体となって行う介護予防事業であり、週1回、地域の公民館に集まり「東大阪市元気でまっせ体操」と談話をする交流活動である。市内各地域に広がっていることから、その取り組み様式は全国でも注目されている(厚生労働省2016)。視察時には、長寿福祉課が参加者の支援のために6ヶ月に一度モニタリングとして行う体力測定と運動が行われていた。Van Son先生からは、アメリカにも同様のプログラムはあるが、モニタリングとして体力測定を行うのは初めて目にしたもので、良い方法であると評価していた。

高齢者への家庭訪問では、日本に来て初めて民家に入る経験であり、神棚や仏壇を備えた住環境に興味を引かれていた。訪問した93歳の夫妻は、高血圧のために服薬はしているものの、毎朝家庭血圧測定をして、テレビ体操や散歩をしながら健康に気をつけているとのことであった(図5)。自立した高齢者の生活は、日本の長寿を裏付ける対象であった。

視察に同伴してみても、WSUの先生方からの質問を受けたり視察後の評価を聞いたりしてみると、日頃あたり前に思っていることが、実際には日本ならではの誇れる仕組みであり、価値ある事業であると知ることが出来た。これは、同伴者の教員のみならず、同時に視察を受け入れてくれた地域保健の現場の方々にとってもエンパワメントの機会であった。

Ⅶ 学校保健看護学分野の視察

筆者は、2017年2月に引率教員として、WSU研修に同行した。研修中、Jo Ann先生のコーディネーターでワシントン州のCentral Valley High Schoolの見学を行った。School NurseのDeborahさんからSchool Nurseの仕事について説明を受けた。保健活動としては、主

に管理的なかかわりを行っているが、教育的かかわりの必要生を感じている。しかし、米国の多くの学校は、1人のSchool Nurseが複数校を持ち回り、1校に週2日程度の勤務となっている。このような背景から、健康教育を推進する上での課題が多くあることが話された。また、Jo Ann先生からも、養護教諭の活動は、むしろ日本のほうが豊かな取り組みがされているとの指摘があった。そこで今回、Jo Ann先生の視察施設として、小学校と高等学校、特別支援学校を計画し、我が国の養護教諭と米国のSchool Nurseの相違についてディスカッションすることを目的に視察施設を設定した。

滝沢市立鵜飼小学校では、年間計画に基づいて養護教諭が実施している保健指導の実際を参観することが目的であった。保健指導のテーマは、「乳歯から永久歯へ生え替わり時期にある自分の歯の状態を知ろう」で、4年生を対象に、教育課程に位置づけられている「ぐんぐんタイム」で行われていた。Jo Ann先生は、教育課程の中で健康教育が行われていることや、小学生時期から自分の体の仕組みについて学べる教育システムについて、興味深く質問なされていた。

岩手県立盛岡第一高等学校では、健康診断や保健調査結果を軸に組み立てている保健教育活動を紹介してもらうことが目的であった。養護教諭からは、高等学校における保健教育のねらいや具体的活動や、保健便り「Your Better Life Through Health」をツールにして行っている保健指導について説明された。Jo Ann先生は、肥満をテーマにした保健便りに関心を示され、学生に見せたいからと保健便りを頂いていた。また、生徒が清掃活動を行う様子を見て、大変驚いた様子であった。児童・生徒が学の清掃を自分たちで行うことには、教育的意義があることを伝え、ぜひ研修学生に体験させたいと話されていた。

岩手県盛岡となん支援学校は、医療的ケアを必要とする児童生徒が在籍していることから、学校看護師が配置されているので、日本の養護教諭の独自性について紹介することが目的であった。日本では、医療的ケアにおいては、学校看護師はケアを、養護教諭はコーディネーターの役割を担っていることを説明した。Jo Ann先生からは、米国のSchool Nurseもマネジメント機能をもって仕事をされていることの紹介が

あり、養護教諭とSchool Nurseの役割について多くの議論を行うことができた。

養護教諭は、日本独自に発展させてきた職種である。その前身は学校看護婦であり、出発においては欧米諸国と同じ公衆衛生看護の一端であった。しかし、欧米諸国がそのまま公衆衛生看護の立場で学校や子どもたちに関わってきたのに対し、日本の養護教諭は教育職員として学校の中に定着してきたという独自文化もった職種である。今回の視察を通じて、米国のSchool Nurseも教育的側面を重要視していることや、教育課程に位置づけられている日本の保健教育のあり方をめざしていることを再確認できた。このことから、今後WSU教員や大学院生が研究の目的で交流していくことには、大きな意義があると考えられる。

Ⅷ 大学院看護学研究科におけるFD

日程3日目(10月3日)の13時から15時に、「米国における大学院教育のカリキュラムとファカルティ・デヴェロップメント～ワシントン州立大学スポークン校の場合～」というテーマで、Jo Ann先生とVan Son先生に講演をしていただいた(図6)。

対象者は、看護学部全教員と大学院生で、当日参加者は33人であった。

講義では、学部、修士課程、博士課程の概要について説明された。

看護学部は米国で4番目に歴史が古いことや、3つの主要な分野として、研究、教育、貢献事業(学部内、大学内、地域、州、国、地球単位)があることが説明された。その内容は本学や日本の看護系大学とほぼ同様であった。

また修士課程(看護学)については、1990年から始まり、2年課程で、論文コースとNurse Practitionerのコースのうちどちらかを選択すること、学修内容は、Population Healthに主眼を置き、選択制で、教育、リーダーシップ、個別学習をしていること、最終課題は修士論文の作成であり、現在、20人から30人の学生が学習していることが説明された。

博士課程は、論文コースであるDoctor of Philosophyと実践を重視したDoctor of Nursing Practice(DNP)があることが説明された。

Doctor of Philosophyは、2007年から始まり、看護研究者の育成に主眼がおかれたプログラムで、4年から5年のコースワーク期間が必要で

あり、最終課題は博士論文の作成であること、現在、20人から30人の学生が履修していることが説明された。

また、Doctor of Nursing Practice(DNP)は、2012年から始まり、Family and Mental Health Nurse Practitionerの有資格者が履修するコースで、3年から5年のコースワークが必要であり、最終課題はこのコースへの移行プロジェクトを終了することであることが説明された。特に、Doctor of Nursing Practice(DNP)コースは開始されて間もないため、修了生が履修生を教えている現状があり、今後、修了生が増え、臨床や社会での修了生の発展的な活動が囑望されるという説明があった。

さらに、教員や大学院生の研究活動を支援するために、リサーチセンターがあり、研究で必要とする統計学的分析や研究手法について、いつでも助言が得られることが説明され、研究支援環境の良さが伺われた。

常勤(終身雇用)の教員は、教育の他に学部運営に関する業務が多く、忙しいことが説明され、参加者の共感を得ていた。教員は長期休暇中に研究プロジェクトへの参加や病院で臨床経験を積むなど、日本とは異なる就労状況についても説明がされた。

講演後のアンケートでは、「わかりやすかった」「興味深い内容だった」という意見が多数を占めた。

逐次通訳であったため、実質の講演時間が短く、学部・大学院の詳細なカリキュラムや、ディプロマポリシー及びカリキュラムポリシーとの関連についてまで伺うことができなかった。今後も、このような内容についてもご講演いただき、ディスカッションすることが望まれる。

Ⅸ 県内の文化施設の視察

今回の来訪プログラムの終盤には、先方の要望に沿って岩手県内における文化施設の視察を盛り込んだ。視察先は、岩手県立博物館および平泉の中尊寺・毛越寺である。

最初に訪問した岩手県立博物館では、主に日本や岩手県特有の歴史・民俗・考古学的展示物に興味を示され、学芸員や同行した教員に多くの質問をされていた。なお、博物館側とは事前にWSU教員の視察について連絡・調整し、英語対応が可能な学芸員の方にご担当いただくことができた。「チャグチャグ馬コ」の展示や博

物館の敷地内にある国指定重要文化財の「曲り屋」の内部も見学し、自然や動物とともに暮らしてきた岩手の人々の文化も体感していただく機会となった。

また、翌日には世界文化遺産の一部でもある中尊寺・毛越寺を訪れた。中尊寺は西暦850年の開山と伝えられており、境内には本堂、金色堂をはじめとする歴史ある建造物が多数存在する。これらが現代に至るまで人々の手で大切に守られてきたこと、そして日本の歴史の深さに対し、驚きと尊敬の念が幾度となくお二人から語られていたのが印象的であった。同行した教員も、この文化施設視察におけるお二人の先生方の目線を通して、新たな視点で日本や岩手について見つめ直す機会を得た。

国・地域の歴史、民俗といった文化的な事柄は、看護の対象である人の理解に繋がるだけでなく、健康観や健康そのものにも密接に関連するものである。日本、そして岩手の人々に対する理解を深める上でも、今回の文化施設の視察は看護職として非常に有意義であったと考察される。

X おわりに

今般の来訪事業を通して本学とWSUとの国際交流は、より確かなものとなったと実感させられた。今後も変わらず両校間の交流が継続していくことを心より祈念している。

しかし、今般の事業は必ずしも順調に展開した訳ではない。「事前準備」でも述べたように、WSU側から本学への来訪の意向が表現されたのは平成29年3月で、既にこの時期、本学では29年度の予算要求時期が既に過ぎており、通訳費用、視察施設への交通費などの事業の必要経費を事業予算化していない状況で、スケジュー

ル作成が進むという異例な状態になってしまったのである。

つまり、日米間の国際交流事業には、日米の学年暦の違いから生じる困難があることを想定しておく必要が存在することも明らかになった。また、学部教員は普段の教育・研究・地域貢献・大学学務のそれぞれの業務を行いながら、国際交流業務をもこなさなくてはならず、担当者の負担は非常に重いものとなっている。

近年、多くの大学では「国際交流センター」を設置し、上記のような特定の担当者に過重な負担が生じないように大学として各学部等での「国際交流」が支援されていると聞かすが、本学には「国際交流センター」はなく、国際交流は事業の準備段階から事業実施に至るまでの教員の負担が著しい。この点の改善を心より望むばかりである。

謝辞

本事業は、本学の鈴木厚人学長の御判断により本学開学20周年記念事業に位置付けていただき、本学事務局総務課、国際交流推進グループの方々から、多大な財政的・人的御支援をいただきました。この場をお借りして御礼を申し上げます。

引用文献

- 厚生労働省 (2016) : 平成27年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金「地域づくりによる介護予防を推進するための手引き (地域展開編)」, pp15-16
- 千田睦美 (2015) : ワシントン州立大学における研修報告, 岩手県立大学看護学部紀要, 17, pp51-55



図1 授業視察（看護情報学）



図2 歓迎プログラム(ジョアンズ・キッチン・シャトン)



図3 次回WSU研修予定の学生との打合せ会



図4 離乳食教室



図5 家庭訪問



図6 研究科FD